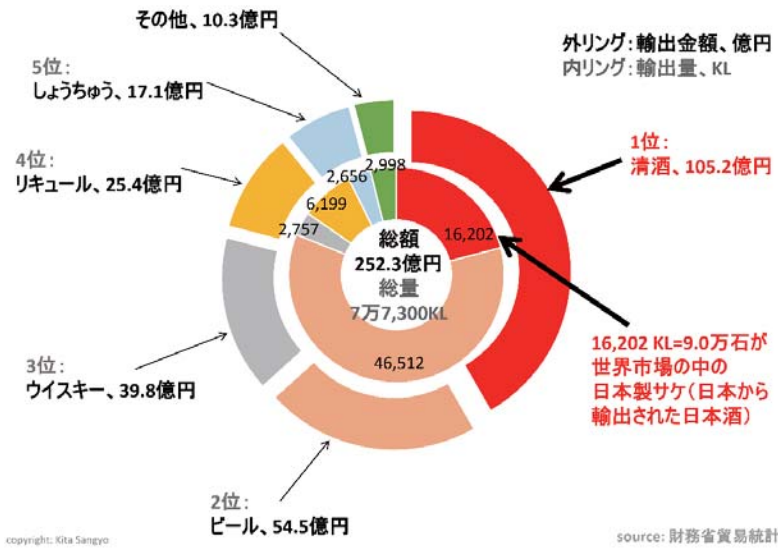


ちょっと意外な酒類の統計、あまり知られていない統計データを、ビジュアルな資料で紹介するコーナー。当社で蓄積しているデータを不定期連載でお届けします。

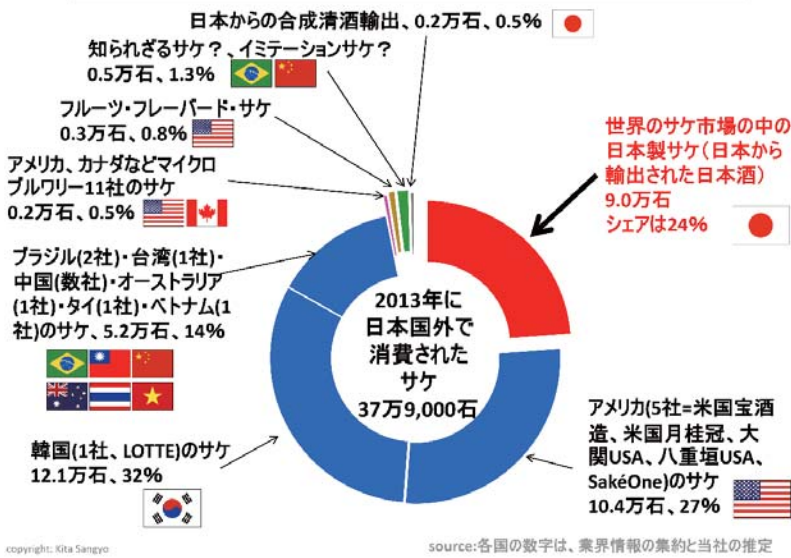
2013年に日本から輸出された酒類252億円、うち清酒が105億円



今回は「SAKEの世界マーケット@2013年(と@1933年)」をご紹介します。

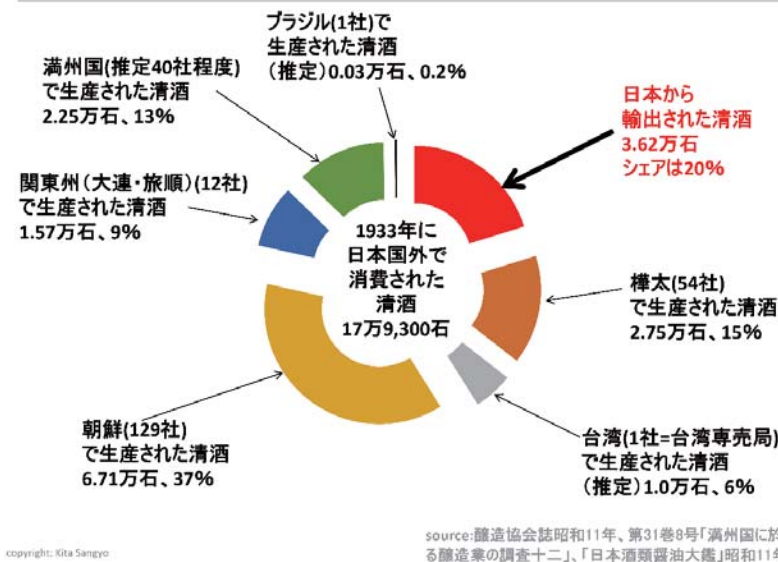
- 1位「清酒」の100億円超えは日本にとって画期的。2011年87億7,500万円→2012年89億4,600万円→2013年105億2,300万円、という推移で史上初めて100億円を超えました。日本の酒類輸出総額の42%を清酒(世界市場での一般的呼称はサケ/SAKE)が占めています。
- 3位「ウイスキー」は対前年比61%増で、驚愕的な伸びです。2位「ビール」21%増、4位「リキュール」24%増も絶好調。日本の酒類輸出は全体として、2013年、急成長しました。
- 「しょうちゅう」の輸出は、清酒の1/6(量・金額ともに)の規模。リキュール輸出は、たぶん6,199KLの半分以上が「梅酒」。すなわち、焼酎輸出(2,656KL)は梅酒輸出より少ないことになります。
- 甲州種の日本ワインの輸出が注目されていますが、2013年の「ワイン(財務省統計のカテゴリーでは「ぶどう酒」)の輸出金額はまだ1億2,400万円に過ぎません。(グラフ中の「その他」に含まれています。)

「2013年に日本国外で消費されたSAKE<推定>37万9,000石」の生産国の内訳



- 海外ではサケブームですが、日本製サケ(「日本酒」)の数量シェアは24%。「海外で消費されるサケの4本に3本は日本製ではないサケ」ということになります。
- アメリカ、韓国、ブラジル、台湾、中国、オーストラリア、タイ、ベトナムのサケメーカーの数量シェアは合計で73%です。
- その他の4つのカテゴリーは、「アメリカ、カナダ、ノルウェーなどにあるマイクロ・サケ醸造所」、「主にアメリカで販売されているプレミックスのフレーバード・サケ」、「中国やブラジルで見られる、ラベルには「SAKE」と表示されているけれど製法が日本の清酒とは異なるもの」「日本の合成清酒の輸出(これも海外ではSAKE)」で、合計で3%強です。
- 純米酒の比率: 輸出される清酒の区分の統計データはありませんが、「純米酒」が多いと思うものの、アルコール添加された「本醸造」や「普通酒」も相当輸出されていると思います。(日本国内では、全清酒に占める「純米酒」の比率は15%くらい、アルコール添加量が多い「普通酒」が70%) 一方、外国製はどうかというと、アメリカ製はすべて純米酒、オーストラリア・ベトナム・台湾などもメインブランドや新製品は純米酒です。(韓国は未確認。ブラジルはアルコール添加のサケもある。) 世界市場で、本家たる日本酒の純米酒比率が低いのは、改善すべき点ではないかと思えます。

「1933年(昭和8年)に日本国外で消費された清酒<推定>17万9,300石」の生産国の内訳



- 偶々、ちょうど80年前の1933年(昭和8年)のデータがそろっているので、同じようなグラフにしてみました(注:アメリカにも清酒メーカーがあったが、禁酒法時代で生産停止中)。
- 日本で造られて輸出されたのは20%、日本本土以外の生産(当時、樺太、朝鮮、台湾、関東州は日本領土でしたから海外とは言いにくい)が80%。今とそれほど変わらぬ比率のようにも見えます。
- 1933年に日本国土以外で消費された清酒は17万9,000石。2013年の37万9,000石の1/2くらいですが、80年前は日本の人口が1/2、世界の人口が1/3であったことを考慮すれば、現在とそれほど変わらないレベルとも言えるでしょう。ただし、サケ消費の実態は、80年前: 外地の日本人需要・移民日本人の需要が99%、現在: 日本人でない現地人需要が90%、という違いがあります。
- 純米酒の比率: もうひとつの決定的な違いは、80年前の清酒は、日本製も、樺太製も、台湾製も、朝鮮製も、満州国製も、すべてが「純米酒」と考えられること。アルコール添加や合成清酒の技術は、戦前から戦争中にかけての原料調達難に対応して生まれた手法です。

(text = t. kita)